

能を切る



「四賢婦人・矢嶋楯子の生涯」

文||福永無想

第十四回 「異国の夫人」

明治10（1877）年。明治維新の立役者だった西郷隆盛が挙兵した、士族による反乱事件「西南戦争」が勃発した。

熊本で薩摩軍を迎え撃つために、最高司令官の山縣有朋の命を受けたのが熊本城鎮台司令長官の谷干城だった。2月19日、熊本城の天守閣が燃え上がった。その火は城下町までも焼き尽くした。火事の原因は不明だが、焼け野原になった城下は薩摩軍の進軍を防ぐ障害物となり、政府軍は50日もの籠城に耐えることができた。そして田原坂の激戦から数カ月後の9月、兵を引き戻した西郷隆盛は故郷・鹿児島島の城山で自刃した。

楯子の上の姉で、横井小楠に嫁いだつせ子は小楠亡き後、家族らと古城堀端の家で暮らしていた。だが、この城下の火事で家は全焼した。つせ子らは姉・にほ子が住む本山の家の近くに居を構え、パン屋を営みながら生計を立て直すことにした。この知らせは、東京に住む楯子の元にも届けられた。

熊本を舞台に、国内最後の内戦とされた西南戦争が終わり、武士の世に終止符が打たれた。うらはらに、楯子が暮らす東京は文明開化の声高く、西洋館やガス燈が建ち、着物から洋装に変わり洋食をたしなむなど、欧米主義が高揚していた。

こうした中、キリスト教の普及も例外ではなかった。英米の宣教師による伝道活動が盛んに行われ、学校教育にも力が注がれた。文部省などによる女子中等教育の遅れの中、先んじて設立されていたのがキリスト教主義の女学校である。

明治11（1878）年、秋も深まろうとした頃だった。日本基督一致教会の牧師、安川亨が楯子の元を訪ねてきた。

「米国の宣教師で新栄女学校のマリア・ツルー夫人が、日本人の教育者を探しておいでです。矢嶋さん、引き受けてみませんか」

楯子の教師としての実力は広く知られており、安川もまたその評判を聞きつけた一人だった。

「しかし、私はキリスト教徒ではありませんし、仕事が終わるとは……」

「いやいやそう言わず、一度お会いになってみてください」

そうやって安川は、新栄女学校の住所を記した紙を残して帰って行った。

新栄女学校は築地にあった。訪ねたその日、マリア・ツルー夫人は外出していたが、楯子は一日中その帰りを待つことにした。

「長い時間、お待たせしてしまいました」

薄い唇の口角を上げてほほ笑み、流ちょうな日本語で迎えたマリアの美しい瞳と透き通るような白い肌に、楯子は少しだけたじろいだ。亜麻色の長い髪をまとめ上げ、落ち着いた雰囲気と漂わせるマリアだったが、楯子より7つも年下だということも分かった。

周囲の人々はマリアのことをミセス・ツルーと呼んだ。1840年にニューヨーク州のボルジンに生まれたマリアは、15歳の時にキリスト教に入信した。その後、神学校教師だったアルバート・ツルー氏と結婚し、夫婦で熱心に伝道を続けるも夫が病死し、31歳の若さで未亡人となった。夫の意志を継いだマリアは明治7（1874）年に来日した。楯子が熊本から上京し、教師になった頃のことである。同じ教育を志す者としての奇遇な重なりからか、楯子はすぐさまマリアに親近感を覚えた。

「矢嶋さん。私は日本の女子教育は日本女性の手で行うべきだと考えています。あなたのお力をお貸しください」

マリアの瞳は力強く輝いていた。そして楯子の胸に、久々に熱いものがこみ上げてくるのだった。

※この物語は、矢嶋楯子の資料をもとに描いたフィクションです
※幕末、明治・大正という時代背景から人権意識に反する不適切な表現と思われる場面があるかもしれませんが、差別を意図したものではありません

四賢婦人記念館

益城町杉堂1250 電話/286-4959

開館/9時30分～16時30分 休館/月曜(祝日の場合は翌日)

入館料/一般・高校生200円(160円)、小中学生100円(80円)

※()は30人以上の団体割引料金

